



## 【地域らしさの芽 他地域の事例から】

21世紀型産業のキーワードは、健康、環境といわれています。また、コミュニティと緊密なつながりの上に機能するビジネスにも同様に期待の目が注がれています。会社設立の際の資本金規制の特例、地産地消の定着、NPO法人の設立、エコマネーの広がりといった動向が、市民起業や新ビジネスを後押ししています。

身近なところから発想したビジネスの事例に、独創企業のヒント、まちづくりの芽をみつけてください。

### 仲間づくりから生まれた特産品—滋賀県竜王町・そば振興会

地域の仲間の活動から起業したグループがあります。滋賀県竜王町の「竜王町そば振興会」です。休耕田でそば栽培を行い、加工・販売し、そば店も開業しました。竜王町に住むサラリーマンたちの副業で、会員と賛同者で運営をしています。

竜王町は肉牛や果樹栽培のまちで、そば産地としての知名度はありません。そもそも仲間同士の思いつきははじまりで、自分たちで栽培したそばを自分たちで打って食べてみたいという遊び心でした。機械や技術も間に合わせでしたが、怖いもの知らずで体当たり。製粉や製麺も自前できるようになりました。

特色の一つは、できる範囲でできる方法を考えたこと。多くの人たちにそばを食べてもらうため、県内のイベント会場にそば屋台を出したり、出前そば打ち教室を続けました。こうした活動が、竜王町とそばの認知度を高めました。

会の活動が活発になると、休耕田で会のそばを栽培する地元農家も増えました。そばをまちのブランド作物に育てようという気運も生まれつつあります。

### 古いだけの町並みがエコミュージアムに—大分県豊後高田市・昭和の町

現存する地域資産を活用してまちを活性化するのが、大分県豊後高田市の「昭和の町」の取り組みです。商店街の7割が昭和30年以前に建てられた建造物という点を活かし、徒歩と自転車で買い物やまちの散策を楽しんでもらうという趣向です。

江戸時代は天領だった豊後高田は、商業のまちとして栄えました。戦災にあわなかったことから、明治、大正のレトロな建築物も残っていて、補修のときにはかつての景観を再現するように配慮しています。

商店街全体を一つのミュージアムとして保全していこうという試みは、わずか7軒の商店からはじまり、次第に広がっています。

昭和の町は、商店街の外観を保存しているだけではありません。各店舗のショーウィンドウの一画には昔の道具や先祖代々の家宝が展示されていて、その由来や店のなりたちなどを店の人が説明してくれます。こうした店先での会話のやりとりも、まちの魅力になっています。

地方の商業スポットはより広い敷地を確保できる郊外へと移転し、旧来の商店街は衰退していますが、逆転の発想と地域の連携で新しいスタイルを確立できる可能性があります。

